

令和5年度 第2回滋賀県環境学習等推進協議会 議事概要

日時：令和6年3月18日（月）14:00～15:45

場所：大津合同庁舎 3-A会議室

出席：参加委員14名

事務局 環境政策課、琵琶湖博物館環境学習センター、森林政策課  
教委幼小中教育課、教委生涯学習課

■議事（1）滋賀県の環境学習の現状と課題について

（資料説明：事務局）

会長

- 環境学習に関する近年の国内外や県内の動向、あるいは環境学習推進計画の取組状況やアンケート調査の結果などについて、事務局でまとめていただいた。資料1のP.52の項目も踏まえて議論を進めていきたい。
- 今回は、推進計画の改定に向けた検討のスタートであり、改定の方向性について、自由な観点でご意見をいただきたい。

委員

- 気候変動に対する教育や自主的に活動する若者を早く育てたいという思いや危機感がある中で、社会を変えていく力のある若者たちをどうやって育てていくか。また、地域や団体、教育現場などで子どもたちと関わる際に、どういった姿勢で子どもたちの自主性を伸ばしていけるかという点を考えていきたい。
- 私自身も地球温暖化に対する啓発に取り組んでいるが、環境問題に対して子どもたち、あるいは保護者も含めて、危機感があまりないと感じる。そうした中で、自主的な活動や楽しみながら取り組むこと、あるいは成功体験を様々な場面で作りながら、自分自身が社会を変えていけるという感覚をもってもらいたい。

委員

- ギアモデルの考え方はすごく大事だと思う中で、人育てのギアは、何を示しているかイメージができるが、社会づくりのギアの「解決する」はイメージが付きづらい。数値の捉え方や「解決する」がどのようなものを指しているのか、という点についてもう少し教えていただきたい。

会長

- ギアモデルで一番大切にしたい点は、「気づく」だけではなく、そこから「学ぶ」、「考える」、あるいはその先にある「行動する」というステップを、学習者や事業を実施する側が、常に意識すること、また、人づくりが社会づくりにつながっていくというつながりと両者の関係性を明確にすることである。

- 社会を変えるというのは難しいが、その中で「解決する」というのは、例えば、地域課題を解決すると言ったイメージ。あるいは、「解決を目指して行動する。そのためにさらにつながっていく」という解釈の方が良いかもしれない。

#### 委員

- 課題を解決するという点では、先ほどの成功体験につなげるという意見にも近いと思う。滋賀県は、琵琶湖をはじめ、自然を主にした学習やエネルギーの分野なども含めて、すでに多くの取組がされていると思う。これらをさらに発展させるというところであれば、例えば、学校の課題と併せて、環境問題をどう解決するか。あるいは地域の課題とともに、環境の課題をどう掛け合わせていくか。という視点も大事になると思う。
- また、そうした分野で、解決にむけて行動される際に、異なる主体が協働できると、学習の対象者以外も含めて、一緒に学べる場が作っていけると思う。
- また、そうした場を作るための役割を担うコーディネーターは、必ずしも、環境に詳しい方を育成する必要があるわけではない。例えば、地域コーディネーターのような人たちが、地域課題を解決する場に、何かアプローチをしたり、あるいはそういった人たちと一緒に学んだり考えたりする場を構築していくという考えもあるかと思う。

#### 会長

- これまでは環境という分野に限って捉えてきたが、すでに時代としては、持続可能社会の実現に向けて、環境・経済・社会を同時に向上していかなければならない。そのため、あまり環境の分野に限定しないで、地域の課題をもとに、解決に向けて試行錯誤しながら学ぶことが重要である。
- これはESDの考え方そのものでもあるので、次の計画では、その視点をもう少し前面に押し出していくべきだろう。

#### 委員

- 今回は少し大きな視点で話をさせていただくが、環境学習について、我々も本質をしっかりと捉えて考えるべきであると改めて感じた。何のためにこれを行っているのかというところが、教育の現場でも揺らいでしまう部分があり、あれもこれもしなければならぬという状況の中で、目的に立ち返れるように、「ESD for 2030」や新学習指導要領の記載も含めて、どういう人たちを育てていく必要があるのかを、もう少し現場としても意識を持たなければならぬと感じる。
- 幼児教育も、平成元年からずっと主体性を大事にして取り組んでおり、小学校・中学校と学年が上がっていく中でも、子どもが学び手の中心であるという点で、社会全体の仕組みを変えていかなければならないところに来ている。
- 教育現場も大変な状況にある中で、社会教育や生涯学習、また先ほどのコーディネーターの方々も含めて、どのようにつながるかを仕組みづくりとともに、誰が仕組みを変えていくかまで議論できれば良いと思う。

#### 委員

○資料の 39、40 ページについて、環境保全行動に関してどのように把握するかをこれまでから議論をする中で、今回新たに LINE アンケート実施されたが、今回の LINE アンケート調査でも若年層の回答数が少ないので、どのような方法で周知等を実施されていたのか。

#### 事務局

- 実施方法としては、滋賀県公式 LINE アカウントの登録者（約 9 万人）を対象にアンケートを実施している。
- LINE アンケートの場合は、インセンティブを設けながら、回答に協力いただく形となっている。LINE 公式アカウントの登録者に若い世代が少ないということも、一つ要因としては考えられる。
- また、周知については、環境政策課では実施しておらず、広報課で取りまとめており、年間 10 回程度のアンケートを実施する中の一つとして、協力を仰いでいる。

#### 委員

- 登録者を対象にアンケートを実施しているということか。
- どのようなきっかけで LINE アカウントを登録されているのか。

#### 事務局

- そのとおり。
- 登録のきっかけとして、しが割の利用が大きいと考えられる。

#### 委員

○実際に登録者数の内訳として、若年層の割合が少ないのか。登録者としてはいるが、回答が少ないだけなのかという点は、今後の検討につながると思うので、そこも含めて分析をしていくのが望ましい。

#### 事務局

○登録者数の内訳については改めて確認する。

#### 委員

- 先ほど成功体験をできるだけという話もあった中で、大学生など、すごく頑張ってやっている方々もいるかと思う。また、若い人たちだけでなく、色んな世代が滋賀では活動されているので、そうした活動をできるだけ見える化できたら良いと考える。
- こうした活動が何かしら評価できたら良いと考えており、最近では、地域通貨で「ビワコ」などのポイントをもらえるような仕組みも出来つつあるので、例えば、そういった仕組みにつなげることで、環境に熱心に取り組んでいる方たちをポイント化し、それをまた環境だけではなく、地域につなげていく仕組みができれば、やっている人たちもすごく評価さ

れることにもなり、やってない方もこういうことをやっているという学びにもなるかなと思うので、何か今後、活動が促進できるような評価方法を検討できれば良いかと思う。

#### 会長

○ギアモデルはギアを学習者自身が回していくという意味で自身の中で完結しているが、今の御意見は、外側からそれをほめてギアを回すことを促進するイメージになるかと思う。

#### 委員

○今回の議論の一つである学校や地域における環境学習の課題について、p. 50にも記載されており、この課題を解決すればほとんど解決できると思う。2点目の主体的に行動できる新たな人材の育成、地域の担い手づくりについては、すでに各市町で取り組んでいると思うので、その事例を広げていくこと、またそれをどのように取りまとめていくかについても課題であるので、その点も明記できればと思う。

○また、コミュニティースクールなど、学校運営協議会では、学校と地域をつなぐコーディネーターも活動しており、それらのコーディネーターを統括しながら、活動をどんどん推進することができている。環境教育の分野においても、先生方だけでは取り組めないところをコーディネーターが上手くつなぐことで活動を促すことができる。そういった仕組みが各市町でも出来つつあると考えている。そうした市町の取組をより広げていけるように、県が支えていけるような仕組みを検討していければ良い。

#### 会長

○この協議会は、どうしても取り上げる対象が県の取組が中心となってくるが、市町においても先進的な取組があるので、そうした取組を改めて高く評価しつつ、紹介していけると良い。

#### 委員

○資料1のp. 54にある「環境教育を受けたから」ということで、29歳以下の回答が15%と出ているが、環境教育を受けた世代と受けていない世代では、関わる中で違いがあると感じる。

○若い世代は、しっかりと環境教育を受けているので、確実に変化しているという印象を受ける。今後、さらに取組を進めていくためには、もちろん学校の先生方も頑張っているが、事例として紹介されている児童クラブの取組も重要になってくると思う。最近、児童クラブに通う児童数が多くなってきており、時代の変化もあり、共働きの家庭が多い状況なので、大半の時間を学校、児童クラブで過ごす割合が多い。そこでの生活の中で、継続的に環境のことを考える機会を増やしていくかで、差が出てくる。

○実際に、児童クラブでの取組を1年間かけて実施すると、非常に変化が出るということがわかってきた。児童クラブの先生も上手く人材を活用して、環境教育に取り組んでもらうことも一つの方法かと思う。

- 気候変動に関する教育も非常に重要である。
- また、コーディネーターを上手く入れていくことが大事である。中間支援組織やコーディネーターが、いかに学校や地域、そしてまた見落とししているところの教育部門とどのように関わっていくかということだ。今までは連携があまりできていない部分が多かったかと思うが、そこに時間をかけてやっていける人々を作っていけるかどうかに関わってくるのではないか。
- また、評価をするという点で、事例の紹介も含め、どのような取組をしているのか、また、どのような視点があると、上手く取り組むことができるかを見ていくなど、評価の仕方次第では、評価される側だけでなく、社会の仕組みを変えていくことができると思う。そうした点を次の計画の中にも入れられるとさらに良くなるのではないか。

#### 会長

- 市民活動をコーディネートする存在として中間支援組織がある。ただし、地域の組織であるか市町の組織であるかで役割が異なるところもある。それらをつなげるという視点も重要である。
- 一点気になる点として、滋賀県の場合、1970年代から自然愛護教育、80年代に「碧いびわ湖」の副読本など、延々と環境教育に取り組んできているが、若者の変化を感じるのは最近になってのことか。

#### 委員

- 20代よりも後に生まれている世代で変化を感じる。

#### 会長

- 学校現場の方には、異なる意見があるかもしれないがいかがか。

#### 委員

- 「うみのこ」の取組ができたときに、学校で活用するための副読本「碧いびわ湖」が発行されていたが、当時は、そうした教材が上手く活用できなかったところもあった。最近では、「うみのこ」の事前学習など、学習するためのシステムが出来上がってきたことが、ここ20年間くらいの変化につながるのではないか。

#### 委員

- 学校では、総合学習が入り、自ら課題を作って、解決に向けて行動しようというような教育になってから、教え込まれるというよりも、自分自身で課題を見つけて取り組むという意識ができてきたと思う。さらに今、学習指導要領で持続可能な社会の作り手の育成ということが挙げられて、地域と協働しながら行動していくということが求められるようになり、更に推進されている。
- 一方で、総合学習をやる学校の現場としては困っている状況であると思う。新しいことが入ってきており、さらに、持続可能な社会の担い手の育成まで求められる中で、実際に、

総合的な学習の時間は、年間 70～150 時間ほど、取り組む必要があり、先生に求められることは、自分で地域教材を作って、自分で学習プログラムを作って実施してくださいということが求められている。

- 今までにやってきた教科学習をやりながら、こうしたことが新たに立ち上げできるかという点と難しく、現場は総合学習をどのように進めていくか、困っている状況だと思う。
- 学校任せしているとなかなか難しい状況があつて、学校支援を考えていく必要がある。もちろん学校の中でも、働き方改革や業務改善、多忙だという意見が出ており、そこも含めて、教育委員会でも対応はしているが、ニーズがいっぱい来る中で、学校だけでやるのは難しいので、そこをどう支援するかという点は、本当に考えていけないといけない。
- 学校の先生が頑張っているだけではこれ以上難しいので、制度としてきちっと教育委員会と知事部局で考えて、フォローしていかないといけない。また、現状を知った上で、具体的に考えていくことが必要になるので、その上での現状把握を行った方が良いと思う。

委員

- 環境学習による子どもたちの変化は感じるか。

委員

- 効果検証ということでは難しいが、こども大綱やこども基本法はできて、子どもたちの主体性を大事にしていこうという方向になってので、今後変わっていくと思う。
- ギアモデルでも、大事にしたいと思う点は、「気づく」、「学ぶ」だけで終わっていた学習から、子どもたちに何を考えさせるのか、さらに自分たちがどんな行動ができるかまでつなげることである。制度としてやれば終わりではなく、さらに子どもたちのものにしていくような支援を考え、子ども主体の学習を本当に考えていくべきだと思う。

委員

- 特にリーダーや担い手の育成という部分では、子どもたちや若者が、現在の担い手や担い手の方たちに対する憧れの創出、社会的評価というステータスを上げていく。価値を高めていく仕掛けや仕組みが必要と感じる。
- 親世代としては、社会に貢献できるようなリーダーを育てるところにはもちろん賛同いただけるが、実際に、我が子がそういった担い手になると言うと、それよりも、親としては、安定した仕事に就いてほしいという思いや本音が見え隠れする部分があると思う。例えば、公務員とか銀行員の方が環境政策に携わっている方もいるが、社会的なステータスや担い手になりたいという子どもたちが憧れるような環境学習のあり方も考えていくことが必要。その先に、環境学習を受けた子どもたちが、自分自身もそういった担い手になっていきたいと思わせるような仕掛けや演出も必要かを感じる。

委員

- 資料 1 の p. 51 に書いているように、関心は持っているけれども、いかに行動につなげていくかという課題について、民間企業の取組として、地域ボランティアを募集すると、結

構希望者がいるので、そうした地域活動を通じて環境意識を高めてもらうというような取組も一つあると考える。

- また、p. 48 で自治会活動を通じて環境学習や環境保全の取組をしていると回答した方が多くいるというところで、そうした地域活動を通じて環境学習に参加しやすくしていくことや市町の先進的な取り組みを紹介しながら横展開することによって、様々な情報を発信できることにもつながると思う。

#### 委員

- 先ほどから学校教育のこともいろいろお話があった中で、総合的な教育の時間は、中学校では、環境・人権・平和の3つを大きな柱に、プログラムに取り組むというところからスタートしたものが、どんどんと様々な分野の学習が追加され、教科に入りきらないものを総合学習の時間で取り組むことになっていった。そうした中で、本当はやりたかったことやプログラムも色々なことに左右されながら進めてきているもの現実としてある。
- 校内で時間数を整備していくのは学校の役割だが、その次のステップに進む時に、コーディネーターをしてくださる方がおられるのは非常に心強い。例えば、キャリア教育で職場体験をお願いするときに、その職場を教員が一軒一軒電話をしてお願いするのは、非常に大変である。そうしたところで、ある程度情報を掌握している方がいれば、学校としての負担は少なくなるし、近隣同士で取り合いとなるケースもあるので、コーディネーターの役割が非常に大事だと感じる。守山市の場合は、市の環境政策課の方が、市内の小中学校の環境学習の取組を調整いただいております、助かっている。そうした点で、学校だけでは難しくなっている中で、別の組織ができあがることによって、学校での学習活動が進んでいくところもある。
- アンケートについても、回答率が低いから関心が薄いかということ、それは少しちょっと違うのではないかと現場からの視点としては思っている。子どもたちを見ていると、ごみが捨てられていれば指摘をしたり、自分たちが率先して拾う姿も見られるので、そうした部分については、数値に表れている評価とは違う、子どもの学びがあるのではないかと感じる。

#### 会長

- 地域と学校をつなぐコーディネーターの配置については、市町によって手厚いところとそうでないところがあると思う。そういった中で県として何ができるかというところは別の問題になるので、コーディネーターに関して、どのような形でサポートできるのかという視点については、一つ大きな課題として議論できればと思う。

#### 委員

- 資料1のp. 50に記載されている環境学習を推進するにあたっての課題は、草津市の抱えている課題と大きく相違ない。
- p. 25に記載されている取組について、草津市で令和3年度から6年間をかけて、地域の自然環境を活用しながら、率先して自然環境を良くできるような人材を育てたいという

ことで事業を展開している。モデル地域として志津地区と笠野東地区を採択している。3年間は市が主体的に関わり、ゆくゆくは地域の方が教えられるようにすることと、地域で人材を育てていくことの二つを柱にして進めている。

- これから人材を育てていくというところで、講師になってくれる人材や1つのプログラムを教えてくれる人は探すことはできる一方で、コーディネーターとして全体をプログラムできる人がなかなかいない。現在は、市の職員がその役割を担っているが、それを、次、地域の方に担ってもらいたいという点で、なかなか上手く進まないところがあり、何とか今後進めていきたいというふうに思っている。
- プログラムに参加していただいた親子の方で、続けてやっていきたいということをお願いして、スタッフとして参加いただく形もあり、そういった方にも教えてくれる人になってほしいと考えている。
- 1点、コーディネーターというものが、どういう方がなり得るのか、どういう方がいるのかが、正直わからない点でもあり、コーディネーターになるためにはどうすればよいのかというところがわかりやすくなれば良いと思う。

#### 委員

- コーディネーターのやり方は様々あると思う。地域のことをよく知っている方とつながることが重要。

#### 会長

- コーディネーターをどのようにしたら育成できるかという点も大きなテーマになるかと思う。

#### 委員

- 学校現場は十分すぎるぐらいシステムティックに取り組んでいただいているので、これ以上、何かをやってくれと言えるような状態ではない。
- そうした中で、青年層や若者層に力を入れて、呼びかけていくべきということで、昨年度から「びわ湖の日」をきっかけに、琵琶湖淀川流域の皆さんに取り組みを知っていただくための事業を実施しており、こうした取組も環境学習に活かせるのではないかと思う。また、環境先進県として、県外にも視野を広げていくというあり方も考えられる。今後、大阪万博に向けて、みんなで取り組むという機運が、関西広域連合の中にも生まれているので、こうした状況も良い機会になるのではないかと思う。

#### 委員

- 10代から30代が、環境意識が低めという評価が出ているということだが、私自身の感覚では、10代、20代、30代は、環境意識をとて心にかけていると思う。アンケートの結果は、回答している方の評価の感覚が違うだけで、自己評価によって判断されていると思うが、当たり前のことをしているだけで、環境保全の活動していないと思っている方もいると思う。

- 今の小学生や中学生と話していると、私たちの感覚以上に、環境について考えているので、それをもっと評価してあげたいと思う。
- 評価することによって、今やっていること自体が、環境について活動しているという認識に繋がると思う反面で、わざわざ評価をしなくてもすでに育っているのではないかと思う。
- 実際、50代60代で、環境保全活動に取り組んでいる方は、非常に熱心に取り組まれている一方で、取り組んでいない方は全く取り組んでいない。悪い方を評価していけば、若年層の方が環境保全に取り組んでいるという結果になるのではないかと思う。そうした点で、評価というよりは、発信をもっとして、若者が低いということではなく、若者たちが当たり前に取り組んでいるところをもっと盛り上げていかなければならないと思う。

会長

- 評価という言葉が適切かどうかというところもあるが、若者が取り組んでいるというところを我々もきちんと把握することも含めて今後の課題としたいと思う。

■閉会：事務局